

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530627  
 研究課題名（和文）  
 乳幼児との情動調律が心理療法家の感受性・想像力をはぐくむ教育訓練プログラム  
 研究課題名（英文）  
 Developing the Sensitivity and Creativity Training Program using Emotional Attunement to infants and children  
 研究代表者 山下 一夫 (YAMASHITA KAZUO)  
 鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授  
 研究者番号：70191278

研究成果の概要（和文）：本研究は、乳幼児との情動調律が心理療法家を目指す大学院生の感受性や共感性にどのように影響を与え、その結果、自己内省力が身につくかを検討し、効果的な教育訓練プログラムを提示することを目的として行った。本研究課題では、保育所実習で乳幼児との情動調律を大学院生が行ったその効果を①尺度を用いて感受性の変化、②観察を行う実習生の内面での気づきについてインタビュー、③事例を通しての変化、④実習後の臨床事例への影響を検証した。

研究成果の概要（英文）：In this project a sensitivity, empathy, and introspection training program, which focused on emotional attunement to infants and children, was developed and its effectiveness was investigated in four consequent studies. The first study was conducted by using three questionnaires, the second study was analyzed interviews of the awareness process of the trainees, the third study was focused on the case studies, and the last study was investigated the changes of trainees' clinical competencies. As their results, we concluded that the sensitivity, empathy, and introspection training program was effective as a training program for graduate students of clinical psychology.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：カウンセラー教育・保育園実習・感受性・想像力・言語化・逆転移・心理療法家・情動調律

- |                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 1. 研究開始当初の背景<br>社会や生活環境がめまぐるしく変化して | いく中で、人々は強いストレスを受け、人々の心の病への関心や心理療法への期待が高 |
|------------------------------------|---|

まってきた。このため、心の問題を専門に扱う臨床心理学が重要になってきた。臨床心理学が社会から担っている命題は、「有能な臨床心理士を如何に育成し、その専門性を保障するか」にある。平成8年以降より試みられてきた臨床心理士養成に関する指定大学院の創設はその要請にこたえるものであった。臨床心理学が社会の中で専門活動として機能するためには、有効な実践活動を提供できることを社会に示していく必要がある。この流れの中で有効な実践活動が提供できる、実証に基づいた(Evidence-based)臨床活動ができる臨床心理士を如何に訓練するかには様々な試みがなされてきた。心理療法の訓練に関しては、心理臨床・カウンセリングにすることがその基礎となり、その知識や技法を訓練するだけでなく、心理療法家自身の感受性や想像力、自己内省力といった能力を訓練することが重要であると考えられる。これは、本研究代表者や研究分担者がこれまで行ってきたカウンセラーの効果的な訓練方法の開発の成果の中から明らかとなったことである(教育改善推進費、奨励研究(A)、心理臨床学研究, 2005)。つまり、心理療法家としての成長が心理療法やカウンセリングの知識や技法の向上には不可欠なのである。そこで本研究課題では心理療法家自身の資質を育むための有効な教育訓練プログラムを開発することがその目的であった。また、心理療法家にとって必要な資質とは、以下の2つではないかと考えた。第一に**感受性**である。感受性が高ければ、他者や対象を感じる事ができ、これが**共感**につながる。第二に**想像力**である。想像力が豊かな人は臨床的能力が高いという報告もある。そして想像したものを**言語化**することにより**自己内省力**につながる。これらの自己の資質を育むためにロールプレイやワークショップ、グループ体験等の有効性が研究されてきたが、本研究課題ではこれらの訓練のために「**乳幼児との情動調律**」の体験が有効であると考えた。ロンドンのタヴィストックでは、精神分析派の心理療法家の感受性訓練を目的として「乳幼児観察」が1946年から行われており、現在も続いている。これは観察者が家庭訪問をして、日常の家庭生活の中に入りこんで、母子の生活をそのまま観察するもので、出産直後2ヶ月から2歳までがその対象となる。観察した記録をもとに週1回セミナーグループで母子関係や赤ちゃんの心の世界について検討するものである。Convington(1991)は乳幼児観察の意義を①母子間で起こっていることを感じ取れ、かつ観察者の中で起こっているこ

とをみられる**適度な観察の距離感**を育てる、②**転移、逆転移の理解**、③**非言語コミュニケーションへの調律**、④**わかろうと考え続ける**あり方を学ぶこと、⑤**発達理論への異議申し立て**、⑥**人には自力で変化していく力がある**ことが信じられるようになることをあげている。さらに山口(1999)は面接者が自身の感情を含めて、その場の**情動を抱えていくこと(Contain)**につながっていくと考えた。言葉をお話することのできない乳幼児ととともにいることによって五感の感覚を使って主観的情緒的な体験を感じ取り、非言語的な意味を想像する。これは心理療法家の姿勢である「**関与しながらの観察**」ともつながり、面接時に面接者に起こる感覚をできる限り意識化することによって、面接関係の理解となる。本研究課題ではこの「**乳幼児観察**」の有効性を踏まえた上で、さらに関与者からの積極的なかかわりを含めた「**乳幼児との情動調律**」を心理療法家の訓練方法として提示した。これまで研究代表者は遊戯療法の基礎的な訓練として乳幼児とのかかわりを位置づけていたが、訓練生が乳幼児とのかかわりの中で子どもに寄り添いながら、子どもと心を重ね合わせ、訓練生の感覚を使って理解することによって心理療法家にとって必要な**感受性**や**想像力**の訓練方法として有効であると考えた。言語に頼りがちな傾聴から、全感覚を使って非言語コミュニケーションへの調律が可能になる。乳幼児観察とは異なり、積極的に乳幼児にかかわっていくので、自分の感じたものが乳幼児が伝えようとしていたものと一致していたのか、不一致であったのかは伝わり、また自己の内面で生じてくる様々な感情ともその場で向き合っていかなければならない。それにより、訓練者の中にある未解決の母子関係葛藤にも向き合っていかなければならなくなる。訓練者はときには乳幼児に同一化し、時には養育者に同一化し、それを通して**自己の内省力**がたかまり、これは**逆転移理解**につながるのである。心理療法の中で、セラピストが自身の未解決の問題から発生している無意識の情動である「**狭義の逆転移**」が起こることはクライアントにとって有害であって、有効ではない。その解決方法としてこれまで示されてきたのはセラピストの個人分析(教育分析)であった。しかし日本では個人分析を受けられる機会は少なく、セラピストが自身の問題に気づく方法が乏しいのが現状である。そこで本研究課題で取り組む「**乳幼児との情動調律**」によって自身の狭義の逆転移を自己内省し、意識化することによって、取り除くことが可能となり、逆転移の積極的な側面、広義の逆転移である「クライ

イベントからの無意識のレベルでの交流がセラピストの意識にのぼった姿」として捉えることが可能となり、クライアント理解につながるのである。訓練生が乳幼児とのかかわりを振り返り、想像力を働かせ、自己内省する場として、週1回の小グループでのディスカッションを行う。これにより他のグループメンバーに自己内で起こった様々な情動体験を意識化し、言語化することが可能になる。そしてこの実習後に附属相談室での事例を担当することにより、クライアントへの共感、逆転移への気づきが有効に用いられているかを検討することができる。

本研究課題で「乳幼児との情動調律が心理療法師の感受性・想像力をはぐくむ」ことが有効に働くことが明らかとなれば、遊戯療法への応用、被虐待児童への対応への応用、子育て支援への応用も可能になる。最後に、育児不安を抱える母親も多く、仕事と家庭の両立から、あるいは核家族化から、身近に相談できる対象もいないため、保育所や保健所等での臨床心理士が必要になってきた。これらの現状への対応にも本訓練方法が有効に働くと考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「乳幼児との情動調律」が心理療法師を目指す大学院生の感受性や想像力にどのように影響を与えるかを検討し、効果的な教育訓練プログラムを提示することである。

感受性を育むことにより、対象（乳幼児やクライアント）への感情移入ができるようになり、これは、共感性につながる。また、想像力を育むことにより対象や自己の内部で起こっている体験をより広範囲に想像することができるようになり、この体験を言語化することにより、自らの内省力が増す。そして、共感性と自己内省力によって、対象（クライアント）への自らの逆転移に気づき、逆転移理解が事例理解につながるのである。熟練した心理療法師であれば、逆転移への気づきが実際の事例の最中に起こり、これを言語化したりすることにより事例が効果的に進むことが明らかとなっている（遠藤, 2000）。本研究課題では、臨床経験が浅い大学院生が相談室での事例を担当したときに逆転移に気づくことができるようになるための教育訓練プログラムを開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、4つの研究からなりたっている。まず研究1は、心理療法師を目指す大学院生

の乳幼児との積極的にかかわりを含めた実習を保育園で行い、実習の事前事後で感受性・想像力・共感の変化を質問紙によって計ったものである。研究2は、乳幼児の観察を行う過程で、実習生の内面でどのような気づきがあったかについて質的に研究をしたものである。研究3は、乳幼児との関わりを行う実習によって実習生の内面でどのような変化があったかについて実習生の関わり的事例研究を通して行ったものである。研究4は、乳幼児との情動調律に焦点を当てた実習がその後の事例にどのように影響を与えているかをスーパーバイザーの視点から調査を行ったものである。

## 4. 研究成果

研究1の結果：

**調査時期：**2007年4月の実習参加前、2008年4月の実習参加後。

**対象者：**臨床心理士養成指定大学院（1種）に在籍し1年目の者60名（男性22名、女性38名）。そのうち保育所実習に参加した者は18名、しなかった者は42名であった。

**実習方法：**保育所実習は、週1日5ヶ月間と夏休みの期間に集中的に毎日行われた。実習の事前事後指導、実習期間中の小グループ（8名）でのディスカッションでの振り返りを行った。

**測定方法：**対人的感受性尺度（松岡・青柳、998）24項目、対人関係過敏性尺度（Boyce & Parker, 1989）36項目、ノンバーバル感受性尺度（和田, 1992）4項目について5件法で回答を求めた。

**結果と考察：**対人的感受性尺度の「被影響性」において実習参加者の事前事後間に有意な差が見られた。そのほかに実習の参加者と不参加者において、対人的感受性尺度の「符号性」、対人関係過敏性尺度の「臆病さ」の間に有意な差がみられた。つまり、保育実習によって乳幼児とのかかわりの中で、言語で思いを伝えたり、乳幼児の思いを言語で伝えてもらったりすることは難しく、自分の感受性を働かせてかかわり、その伝えた、伝わった内容が一致しているのか、していないのかという作業を行った。そのため、自分の言動の他者への被影響性に変化が見られたと思われる。保育実習への参加者と不参加者の間の違いについては、実習に参加する前から参加希望者は他者に対して自分の感情や思いをわかりやすく伝えようとする思いが強い者や、他者からの評価に臆病な者、敏感な者であったということが明らかとなった。

研究2の結果：

**調査時期：**2008年10月。

**対象者：**保育実習を経験した大学院2年生16名。

**面接方法及び内容：**大学面接室にて15分～45分程度の半構造化面接を行った。質問項目は、実習で感じたことやその意義などについての14項目である。

**分析方法：**面接内容を記述化しまとめたものを分析対象とし、回答内容の類似性によって、いくつかのカテゴリーに分類した。

**結果と考察：**「保育実習で良かったことや学んだこと」、「苦勞したことや悩んだこと」の質問項目では、いずれも「幼児理解」のカテゴリーに含まれるものが多く見られ、子どもの発達理解や心情理解ができるようになったことを良かったとする一方で、困った行動への対応や関係のとり方に悩んでいた。「個人にとっての実習の意味」としては、「自己省察」のカテゴリーに含まれるものが多く、客観的な視点の獲得や成長・自信になった等の内容であった。「臨床心理士を目指す院生にとっての実習の意味」では、実践的経験、クライアント理解、関係性への気づきなど「臨床的視点」のカテゴリーに含まれるものが多かった。個々人の回答内容からは、子どもとの関係にこころを動かしながら、幼児理解とともに自己理解をし、揺さぶられ体験をしていたことが伺われた。

研究3の結果：

**調査時期：**2008年4月から11月。

**対象者：**観察者は、保育実習を行った大学院2年生1名。被観察者は、1歳児と2歳児のクラスに在籍する園児。本研究では、そのうち2名を取り上げた。

**方法及び内容：**観察者は週2回午前中保育園に赴き、参与観察を行った。同時に週1回50分のスーパービジョンと保育園の参与観察に関する指導、事前事後指導を受けた。

**結果と考察：**1歳6ヶ月のAとのかかわりは、第1期Aのお気に入りのタオルをきっかけに関係作りをしていく時期、第2期観察者とのやりとりが増え、他児との関わりも増えてくる時期、第3期担任と一対一の関わりを求める時期、第4期Aが頼もしくなると同時に、再び甘えが出てくる時期、第5期Aが自立へと向かう時期に分けることができた。1歳1ヶ月のBとのかかわりは、第1期非言語コミュニケーションを介してつながっていく時期、第2期遊びが展開し、楽しさを共有できてくる時期、第3期Bとの関係が築けていくと共に成長も見え始める時期、第4期

遊びの幅が広がりBの表現力が豊かになっていく時期にわけることができた。参与観察によって観察者は、相手の内的体験の世界に共に住むことで、相手と同じように感じるといふひとつの現象的場に近づこうとする努力（村瀬，1981）を行っており、共感的理解をはぐくむものであった。また、目の前にいる子どもの感覚を味わうことによって非言語連べルでの影響をうけること（山下，1999）で、感受性が育ったと思われた。

研究4の結果：

**調査時期：**2008年10月。

**対象者：**臨床心理士指定大学院に在籍する大学院2年生38名（保育実習経験者13名、未経験者25名）。

**評定者：**臨床心理士養成指定大学院において大学院生の心理面接のスーパーヴィジョンを行っている教員（いずれも臨床心理士有資格者）8名に質問紙を配布し、それぞれが担当している学生について回答を求めた（教員1名につき大学院生2～10名）。

**質問紙：**桜井（1988）の「多次元共感測定尺度」、三原（1998）の「視点とり・役割とり尺度」、鈴木ら（2000）の「多次元共感性尺度」、澤田ら（2001）の「共感性尺度」などを参考に、独自に作成した以下の尺度を用いた。「共感性(8項目)」「想像力(8項目)」「言語化(3項目)」「逆転移のプロセスへの気づき(3項目)」「情動調律(3項目)」「対人的感受性(5項目)」計30項目からなる。5件法。

**結果と考察：**保育実習を経験した群と、未経験群の差を検討するためにt検定を行った(Table1)。「情動調律」において、保育実習経験者の平均値は、未経験者のそれより有意に高く( $t(36)=2.28, p<.05$ )、保育実習を経験した者の方が、経験しない者より、心理面接において情動調律をよく行っていた。その他の尺度では両群に有意な差は見られなかった。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 山下一夫・中野秀美・中津郁子 乳幼児との関わりと心理臨床—臨床心理養成のための保育実習のあり方— 鳴門教育大学研究紀要 査読無し 25, 2010, 65—72
- ② 葛西真記子・中津郁子・末内佳代・久米禎子・粟飯原良造・山下一夫・塩路晶子 乳幼児との情動調律による感受性訓練の効果—心理療法家をを目指す大学院生を対

- 象にー 鳴門教育大学研究紀要 査読無し 24, 2009, 130-141
- ③ 中津郁子・二宮麻利江・山下一夫 初心者カウンセラーによる乳幼児観察のありかたーカウンセラーとしての資質を育むためにー 鳴門教育大学研究紀要 査読無し 24, 2009, 20-32
- ④ 中津郁子 臨床心理を学ぶ大学院生の乳児保育体験ー体験レポートに見る大学院生への効果ー 鳴門教育大学研究紀要 査読無し 23, 2008, 101-109

[学会発表] (計3件)

- ① 中津郁子・久米禎子・両木理恵・葛西真記子・山下一夫 保育実習における感受性・共感性訓練の効果 2009.9.21 日本心理臨床学会第28回大会 (東京国際フォーラム)
- ② 吉岡美千恵・中津郁子 臨床心理を学ぶ大学院生の保育所実習に関する研究ー保育所側からー2009.5.16 日本保育学会第62回大会 (千葉大学)
- ③ 中津郁子・吉岡美千恵 臨床心理を学ぶ大学院生の乳児保育体験ー体験レポートのKJ法による分析からー2008.5.17 日本保育学会第61回大会 (名古屋市立大学)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山下 一夫 (YAMASHITA KAZUO)  
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授  
研究者番号：70191278

### (2) 研究分担者

葛西 真記子 (KASAI MAKIKO)  
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授  
研究者番号：70294733

中津 郁子 (NAKATSU IKUKO)  
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授  
研究者番号：80420553

粟飯原 良造 (AIHARA RYOZO)  
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授  
研究者番号：70420552

末内 佳代 (SUEUCHI KAYO)  
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師  
研究者番号：70403764

久米 禎子 (KUME TEIKO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・講師

研究者番号：90388215

塩路 晶子 (SHIOJI AKIKO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：70314888

### (3) 連携研究者

なし